炎峰青年会の幹部や活動に参加する中核人物のほとんどが草屯「四大姓」の出自であり、伝統的なリーダー層の若い世代である。彼らは、旧世代に特徴的な服従協力とは異なり[47]、近代的な政治結社を通して植民地統治の独裁専制を批判し抵抗する一方、依然として四大姓の「衆議」と「自治と協同精神」の伝統を維持し、炎峰青年会という新たな形で意見を集約しようとした。

(3) 官に対する支持から対立へ

当時の植民地政府、特に草屯庄庄政を主管している地方官庁は、この台湾文化協会の外郭青年団体たる炎峰青年会に対して、いかなる態度と措置をとっていたのか。これらに関して、筆者はすでに別稿で分析した[48]。その主旨は次の通りである。

まとめていうならば、洪元煌を含めた草屯地域の若い世代のほとんどは渥美寛蔵[49]公学校校長の門下生であり、しかも台湾文化協会は、政治に干渉せず文化啓蒙を目的とすることを標榜していた。このため、1921 年に台湾文化協会が設立され、草屯地域の洪元煌らを理事に選出した時には、渥美庄長と助役洪清江ら地方行政の末端官僚は、文化啓蒙を目的とする教育教化活動を支持する立場をとっていた。

たとえば、炎峰青年会が設立される前月に、台湾文化協会は北部災害義援金の募金活動の成功を祝って草屯で大規模な慰労会を開催した。台湾人として初めて東京帝国大学の卒業生となった林茂生を招聘して、教育と社会における文化劇の意義について発表してもらった。これについて、当時のメディアは次のように報道した。

> まず渥美庄長が開会の辞を述べた。次に文学士林茂生氏が、文化劇の意義に関連して自己の経験について述べた。李春孝（ママ）［哮］は謝辞を、洪元煌が感想を述べた。また七時半より、草屯庄文化協会会員が主催する講演会が始まり、聴衆は四百余名。先に林野氏が開会の辞を述べ、林茂生氏の略歴を紹介した。次に林茂生が登壇し、教育の社会的意義について講演し、十一時に散会した[50]。

台湾文化協会主催の講演会は青年層に広く支持されていたので、植民地政府当局は神経

---

47 陳文松「従「総理」到「区長」:与日本帝国「推拖頑抗」的武秀才洪玉麟――以洪玉麟文書（1896-1897）為論述中心」『第六屆台湾古文書与歴史研究学術研討会論文集』（逢甲大学出版社、2012 年）209 ～ 277 頁を参照されたい。

48 陳文松「日治時期台湾「雙語学歴菁英世代」及其政治実践――以草屯洪姓一族為例」（『台湾史研究』第 18 巻第 4 期、2011 年 12 月）57 ～ 108 頁、陳文松、閻立訳「植民地期台湾総督府国語学校における日本人と台湾人校友の役割――「共冶庄政」:草屯地域における渥美寛蔵と洪清江の関係を中心に」（『日本経済史研究』第 15 号、2012 年 1 月）131 ～ 153 頁を参照されたい。

49 渥美寛蔵、宮城県出身。1896 年に台湾総督府国語学校第 3 期講習科を卒業した後、南投公学校草鞋墩分教場教諭として赴任し、後に昇格した草鞋墩公学校の初代学校長となった。1913 年に病気を理由に退職したが、1920 年の台湾地方制度改正を機に、再び初代草屯庄庄長に抜擢された。1938 年に庄から街に昇格した草屯街街長を歴任し、1940 年まで務めている。いわゆる、長期にわたり草屯地域の教育や行政を統轄した人物であった。

50 「台中特訊　文化劇慰労」『台湾日日新報』第 8763 号、1924 年 10 月 6 日、漢文。

を尖らせており、警察を出動させて干渉したり、解散させた事例も少なくない。しかしこの講演会は渥美庄長の覚書と理解を得ていたようであり、円満に終了した。

後の炎峰青年会の成立大会では渥美庄長が祝辞を述べた。これについては総督府系の『台湾日日新報』でも報じられた。その報道内容は以下の通りである。

> 草屯庄青年団　発会式
> 既報南投郡草屯庄に新組織の草屯青年団は先月二十八日午前九時から当地公学校両大体操場に於て其の発会式を挙行したが会員は百五名で洪元煌氏推されて団長となり席定まるや会衆君が代を合唱し洪団長開会の辞を述べ来賓吉田警察課長、渥美庄長其他の祝辞あり団員総代答辞あって式を終わった。[51]

ここからわかるように、当時の植民地政府は文化運動を標榜する団体には容認の態度をとっていた。しかしこの後、洪元煌が台湾人自治などの獲得を求めて台湾議会設置運動に没頭するようになると、植民地政府は従来の容認態度を改め、警察を動員して、日本内地の青年団体を模倣した、区域内公学校の卒業生を対象とする青年団を台湾各地で組織するようになった。[52] 草屯地域も例外ではなかった。1922年以降、台湾文化協会の台湾人としての自治権を自覚する風潮の影響から青年層を守るために、地域社会教化の指導者である渥美庄長と助役洪清江の主導の下、通学区域を基準に「官製青年会（団）」が各地域に創設された。1926年の台湾総督府の調査によれば、この時期に草屯地域内で創設された青年団は以下の通りである。

土城青年団：洪周南[53]（115）。国語普及会、図書購入、道路標識、模範共同耕作地の経営、団旗の制作、風俗改良。大正11年10月30日。
永豊青年会：簡徳生（34）。聴話会、国語練習会、副業講習会。大正11年10月。
秀惠青年会：洪支山（32）。[54] 勧善会。大正13年3月5日。
溪州青年団：白龍樹（43）。家長会、主婦会、婦人会、夜学会、スポーツの会、庭球会、水泳会、音楽会。大正12年10月2日。
新庄青年団：洪深坑（128）。国語普及会、指導標識講習会。大正12年3月11日。

この調査報告からわかるように、洪姓一族出身の台湾人教師は草屯地域社会の官製青年

51 『台湾日日新報』第8791号、1924年11月3日。
52 「青年会は街庄におけるローカルエリートの選抜と養成の装置として機能し、「内地」青年団の運営方法流用しつつも全く異なる展開をしたと思われる」。宮崎聖子「植民地時代の台湾における青年会の成立過程（1910-1926）――北部台湾A街の事例を中心に」（『日本の教育史学』教育史学会紀要第46集、2003年10月）166頁。
53 1900年生まれ、草屯公立学校で勉強し、1920年公立台中中学校を卒業する。許錫専編『草屯地区開発史資料集』（台湾洪氏家廟・財団法人洪氏子女奨学基金会、1998年）280頁「卒業証書」。
54 草屯公立学校卒業、戦争末期洪深坑らと一緒に教化委員に任命される。許錫専編『草屯地区開発史資料集』198頁「日治末期教化委員」。

団運動において、非常に活発に活動しており目立っている。しかもこの調査から、官製「青年団（会）」の経費は、庄の補助金[55]によって賄われていることがわかる。

恩師渥美寛蔵が 1913 年に校長を退職した際、第 1 期卒業生として洪元煌は情のこもった漢詩を作って贈った。渥美が草屯公学校校長を退職するに際して洪元煌が書いた漢詩「贈渥美業師這回辭職從農」は『碧山吟社詩稿』に収録されている。この詩は「手栽桃李門前滿[56]」で始まり、渥美校長と草屯地域の若い世代との子弟の厚い情を詠んでいる。したがって、このような詩文は洪元煌一人だけの心情ではない。これらの「青年文士」は、伝統的な漢詩社の碧山吟社に参加しながらも、その多くが渥美寛蔵の門下生でもあった。

しかし後日（1927 年）、台湾文化協会が分裂し、元文化協会成員蔣渭水と洪元煌が新たに台湾民衆党を組織し、炎峰青年会を民衆党南投支部として階級運動を支持すると、当時の草屯地域を統轄する渥美庄長はこの会を容認することはできなくなった。そのため、1927 年の草屯地域官製青年団指導総会において、渥美庄長は炎峰青年会を「有名無実で、空論ばかりをいっており」、「このような青年会は存在する価値がまったくなく、百害あって一利もない[57]」と批判した。この一方で、炎峰青年会創設以来、洪元煌と炎峰青年会の青年有志は草屯庄庄政および草屯庄長――「恩師」渥美庄長の一挙一動に批判の砲火を浴びせ続けた[58]。戦後に出版された『草屯鎮誌』は、当時の官製青年団と炎峰青年会との対立について、以下のように描写している。

> 民国 8 年（大正 8）、第一次世界大戦の末期、民族自決主義が台頭し、翌 10 年、有志によって台湾文化協会が設立され、風俗改善を主要事業として標榜し、通俗講演をもって民衆を啓発したので、台籍の知識青年は大いに喜んだ。日本人はこれに注目し、文化協会の活動に対抗するために、同 18 年［筆者：これは誤りであり、正確には大正 10 年］日本人は公学校卒業生を鼓吹して青年会を成立させた。各青年会は会費を徴収する一方、募金を行い基本財産を築いた。風俗の改善・日本語の推進・図書館の設置・書籍の伝閲・音楽会の開催・共同耕作地の経営などに従事した。鎮内には、土城青年会・会員 100 名、永豊（林仔頭）青年会・会員 28 名、12 年に成立した新庄青年会・会員 100 名、渓洲青年会・会員約 50 名、秀恵青年会・会員 40 余名がある。日本人の意のままに成立した青年会に対して、台湾文化協会の幹部も負けじと炎峰青年会を組織し、活動と反撃を展開していった[59]。

55 『青年会其ノ他社会教化的団体調』（台湾総督府内務局文教課、1926 年 3 月）12 頁、『全島青年団、処女会、家長会、主婦会調』（台湾総督府文教局、1926 年度）15 ～ 16 頁。

56 詩の一部は次のようになっている。「手栽桃李門前滿。日上樓台眼界明。世態炎涼思小隱。朝衣那及布衣輕」。洪元煌『碧山吟社詩稿』第 146 首。

57 「庄長的暴言」（『台湾民報』第 178 号、1927 年 10 月 16 日）漢文。

58 陳文松「「庄政」大対決――以日冶中期台中州草屯庄炎峰青年会為中心」（『台湾風物』第 62 巻第 4 期、2012 年 12 月）27 ～ 78 頁）を参照されたい。

59 『草屯鎮誌』663 頁。

結局、1899年から1924年までの約四半世紀にわたる洪元煌と渥美の師弟の情誼は、過去の美談になり、洪元煌が渥美校長に贈った漢詩で言及した「有時得共聽流泉（時間があればともに泉の流れる音を聞く）」の約束も雲や煙の如く消えていった。

結論

以上、本稿は植民地政策と地域社会の二つの側面から、1920年代を中心に、官製青年団制度が台湾に導入された主な要因を検討するとともに、草屯炎峰青年会という地域の自主性に基づく青年団体が植民地統治と非官製の自主的青年団体に対して、どのように綿密に力を発揮・維持し、葉栄鐘のいう台湾政治社会運動において「最も有力な精鋭部隊」になったのかを分析した。

これまでの論述を総括すると、以下の結論が導かれる。第一に、かつての学校「青年」は1920年代に「台湾青年」に一転して変貌し、台湾政治改革の旗を掲げ、植民地社会の大多数の青年学生の支持を獲得した。植民地政府はこれに対して、1926年に文教局を設立し、青年団指導者を積極的に養成し、さらに大日本連合青年団と共同で、地方社会教育に関わる職員と公学校の訓導を対象とする第2次全島青年団指導者講習会を開催した。伊沢修二以来の学校「青年」に片寄った政策から、文教局の設立を機に、学校教育と社会教育・教化との関連を強化し、1930年に台湾青年団訓令を公布し、学校外青年層の思想教化を官製青年団に統一して統制を図った。その後、この青年団制度は徴兵制施行の養成機関に変わっていった。[60]

しかし注意しておかなければならないのは、1920年代の文教局の設立と官製青年団の導入、ないし当時の台湾社会と世界情勢の変化は密接に関連しており、特に1921年以降の台湾文化協会が台湾社会と青年層に与えた影響は看過しえない。

第二に、本稿が論じた草屯炎峰青年会の成立過程は官製青年団に類似しているが、その属性は大きく異なっている。炎峰青年会は、伝統と近代との間に位置して、伝統と地域の人的ネットワークを通して維持･連結していた。いわゆる「近代」とは､植民地政府によって導入された植民地近代ばかりでなく、被統治者の主導によって作られる代替的な近代も存在していた。この点が炎峰青年会と官製青年団体が最も異なっていたところである。

最後に興味深いのは、地域社会における植民者と被統治者の関係は決して普遍的ではなく、身分と植民地政策の変遷によって、協同したり対立したり、あるいは両者が同時に存在したりした。1920年代における渥美寛蔵庄長と草屯炎峰青年会の四大姓の若い世代との関係（支持から対立）が、その一例である。

（原文：中国語、日本語訳：南誠・李偉）

60　宮崎聖子『植民地期台湾における青年団と地域の変容』334頁。